

【研究の概要】

【研究テーマ】

多様な「観」を愉しむ国語科学習

【問題意識】

昨年度は、仲間との対話に焦点を当てて研究を進めてきた。その結果、1往復半以上の対話をするためには、ペアやグループだけでなく、共通の考えや異なる考えをもつ仲間との対話の場を設定することが有効であることが分かった。また、自分の考えの変容のきっかけに気付くためには、1単位時間の終末段階において、「なぜ考えが変わったのか。」等の発問によって、本時の学習過程を想起させる必要があることが分かった。

一方で、考えの変容のきっかけが仲間との対話にあることに気付くことができるものの、きっかけとなった言葉や考えにまで着目することができていない子どもが多くいることは課題である。仲間の考えに出合った際に、自分の考えと比較したり、分類したりすることなどが十分にできているとは言い難い。仲間の言葉や考えを自分の考えに結び付けることができていないことが原因であると考ええる。

【国語科学習でめざす子どもの姿】

前提として表出する姿	・ 学習問題の解決やめあての達成に向けて、自ら多様な他者（仲間や教材等）とかかわろうとする姿
感じる段階	・ 言葉による見方・考え方を働かせて、学習の中で理解したことや表現したことを吟味する姿
調整する段階	・ 多様な他者との対話を基に、自分の考えを更新し続ける姿 ・ 身に付けた言葉の力を自覚し、これからの学習や日常生活に生かす姿

【研究の視点①】

多様な「観」を子どもから表出させるための手立て

【研究の視点②】

子どもが多様な「観」を愉しむための手立て

【研究内容】

国語科における「言葉による見方・考え方」を働かせるとは、学習の中で、対象と言葉、言葉と言葉との関係を、言葉の意味、働き、使い方等に注目して捉えたり問い直したりして、言葉への自覚を高めることである。そこで、国語科研究部では、国語科において育成をめざす「国語で正確に理解し適切に表現する資質・能力」と、その育成のために必要となる「言葉による見方・考え方」の両方を含んだものを「言葉の力」と定め、研究を進めていく。

1 自分や他者の言葉一つ一つにこだわる言語活動の工夫

国語科では、自分の考えを表現する上で、叙述を基に考えをもつことが重要だと考える。これまでの実践において、根拠（叙述）が曖昧なまま自分の考えを発言する姿や、叙述と自分の考えとの結び付きが十分でない姿が多く見られた。対話においても、自分の考えやその理由を伝えることはできても、叙述を基にしたやり取りができていたとは言い難い現状である。

そこで今年度は、「読むこと」領域に焦点を当て、叙述を基に、言葉一つ一つにこだわりながら自分の考えを表現することができるようにする。具体的には、文学的な文章の中の1つの叙述に着目した言語活動である。例えば、4年教材「ごんぎつね」における一文「ごん、お前だったのか。いつも、くりをくれたのは。」に着目させ、登場人物の気持ちの変化を考える言語活動を設定する。すると、子どもから兵十の後悔や謝罪、感謝の気持ち等の多様な考えが表出されると推測する。このように、1つの叙述を基に自分の考えを表現することで、学級全体に多様な考えが表出されると考える。

手立ての有効性については、叙述を基にした発言（発話分析）や、教科書を活用している様子（行動分析）を基に検証していく。

2 自分の考えを更新し続けることができる学習問題の設定

これまでの研究から、子ども一人一人がもつ「言葉による見方・考え方」は多様であり、叙述を基に生み出された多様な考えを、仲間との対話を通して比較・分類などをしながら深めていくことが重要であることが明らかになった。しかし、子ども自身が仲間の考えを理解し、それを自分の考えに結び付けようとする姿が表れなければ、多様な考えが表出されても自分の考えが深まることはないだろう。そのため、子どもが自分の考えだけでなく、仲間の考えに触れる中で、自分の考えを更新し続けることが必要であると考えた。ここでの「更新し続ける姿」とは、多様な他者（仲間や教材等）との対話を通して、自分の考えを改めたり、強化したりする姿である。

今年度は、自分の考えを更新し続けることができるようにするために、学習問題の設定に関する手立てを講じる。具体的には、多様な考えが生まれる学習問題や、異なる考えを比較したくなる学習問題の設定である。そうすることで、自分の考えと比較・分類などをしながら、多様な考えを愉しみ、自分が納得できる考えへと更新し続けるのではないかと考える。

手立ての有効性については、自分の考えを見直したり、よりよくしようとしたりする発言（発話分析）や、仲間の考えを基に加筆修正する様子（行動分析）を基に検証していく。



【資料1 「更新し続ける姿」のイメージ図】

1 単元名

おおきなかぶ

2 単元の目標及び評価規準

1(1)ク、2 C(1)イ・(2)イ 言語活動：物語を読んで演じる		
知識及び技能	思考力、判断力、表現力等	学びに向かう力、人間性等
語のまとまりや言葉の響きなどに気を付けて音読することができる。	場面の様子や登場人物の行動など、内容の大体を捉えることができる。	言葉がもつよさを感じるとともに、楽しんで読書をし、国語を大切にしてい、思いや考えを伝え合おうとする。
知識・技能	思考・判断・表現	主体的に取り組む態度
① ひとまとまりの語や文、言葉の響きやリズムなどに気を付けて音読している。	① 「読むこと」において、場面の様子や登場人物の行動など、内容の大体を捉えている。	① 進んで、場面の様子や登場人物の行動など、内容の大体を捉え、学習問題に沿って、物語を読んで演じようとしている。

3 単元について

本単元は、物語を読んで演じる活動を通して、感じたり想像したりする力を養い、伝え合う力を高め、自分の思いや考えをもつことができるようにすることをねらいとしている。

本教材は、おじいさんが種をまいてできた大きなかぶを、多様な登場人物で引っ張る様子を描いた文学的な文章である。登場人物が出てくる順序や行動が繰り返されており、物語全体の内容を正確に理解しやすい。また、言葉の響きなどを感じながら音読することで、人数が増えたり、かぶを抜こうとする気持ちが高まったりする様子を捉えられる。そのため、場面の様子や登場人物の行動など、内容の大体を捉えるという学習に適している。

本単元の学習は、学習問題の解決に向けて、自ら多様な他者とのかかわるとともに、人物になりきって読む力を育成する上で意義がある。

4 子どもについて

子どもは、5月教材「とんこととん」において、場面の様子や登場人物の行動などの内容の大体を捉え、音読を楽しむ学習を行っている。その際、「誰が何をした」や、「どのようなことを言った」など、登場人物の行動などを把握することを繰り返しながら、音読することができた。しかし、音読すること自体に恥ずかしさを感じている子どもも多い。朝の常時活動で詩の音読をしたり、授業内で仲間の音読のよかった点を伝え合ったりすることで、音読のよさを感じることができるよう、指導を継続している。国語科学習においては、叙述を一つ一つ確認する中で、分からない言葉と出合った際には、もっている知識や知っている言葉を出し合いながら言葉の意味を捉える経験を重ねている。また、学級の仲間と学習することに楽しさを見いだしている子どもも多い。小学校入門期にあたる現在は、自分の考えをもつことや、基本的な学習態度を身に付けることを重点的に指導している。

抽出児について

※ 個人情報保護の観点から、省略します。

5 研究内容

本单元における、多様な「観」を愉しむ子どもの姿

グループで物語を読んで演じる活動を通して、学習問題の解決やめあての達成を図ろうとする姿。自ら仲間や教科書などの多様な他者とかわろうとする姿。

1：自分や他者の言葉一つ一つにこだわる言語活動の工夫

本单元では、教師が意図的に編成したグループで、物語を読んで演じる活動（音読活動）を言語活動として設定する。その際、教室を畑に見立て、毎時間ごとに一人ずつ役割を与えたり、決めさせたりする。また、「かぶは抜けません。」の前にある、場面転換を促す言葉や、本文中に何度も出てくる「うんとこしょ、どっこいしょ。」という会話を授業の核に据えることで、叙述を基に、自分の考えを表現することができるようにする。

本時では、各場面の「うんとこしょ、どっこいしょ。」の一文を演じる活動を設定する。そして、大きなかぶや、お面、全文が載ったホワイトボード、声の大小や強弱等を示したカードなどを準備し、子どもに道具の活用の有無を委ねることで、必要な道具を選択しながら、実際に動いて確かめたり、音読の工夫を考えたりすることができるようにする。

2：自分の考えを更新し続けることができる学習問題の設定

本单元では、挿絵や言葉をばらばらに提示し、出てくる順序や、場面転換を促す働きに着目することができる学習問題を設定することで、仲間の多様な考えを聞いたり、自分の考えを伝えたりすることができるようにする。1単位時間の終末では、音読に工夫が見られるグループを意図的に指名し、仲間の真似したいところなどを共有することで、他のグループの音読の工夫に気づき、自分やグループの音読を更新し続けることができるようにする。

本時では、教師が音読した3種類の音声を聞かせ、『うんとこしょ、どっこいしょ。』は、どのように読むのかな。』という学習問題を設定する。また、グループで音読をしている際には、教師がインタビュアーとなり、「どうして声が大きくなったの。」や、「かぶは抜けられないけれど、どうしますか。」など、読み方の工夫や、内容の大体にかかわる質問をすることで、人物になりきったまま、場面の様子や登場人物の行動などを答えられるようにする。

6 単元指導計画（6時間）

段階	主な学習活動及び学習内容	教師の手立て	知・技	意・情・姿	態
生み出す (1)	1 単元のめあてを設定し、学習の見通しをもつ。〈1時間〉 ○ 単元のゴールイメージ ○ 単元のめあて 登場人物になりきって、グループで音読しよう。 ○ 学習計画	○ 教科書を持って読む姿や、動作化を用いて読む姿など、多様な音読の仕方を紹介することで、単元のゴールイメージをもつことができるようにする。			
挑む (4) 本時 4/4	2 文章の構造と内容の把握を行い、音読する。〈4時間〉 ○ 登場人物と内容の大体 (1) ○ 大きなかぶを見たときのおじいさんの様子 (1) ・ かぶの大きさ ・ おじいさんの行動 ○ かぶが抜けない様子 (1) ・ 「～、かぶは抜けません。」 ○ 繰り返される言葉 (1) ・ 「うんとこしょ、どっこいしょ。」	○ 登場人物の挿絵をばらばらに提示し、並べ替える必要があるという発言を取り上げることで、登場人物や、出てくる順序に着目することができるようにする。 ○ かぶの種をまいたときのおじいさんの様子や、かぶが大きく成長するまでの様子を考える際には、朝顔の種をまいたときはどうだったかと問うことで、自分とおじいさんとを重ねながら考えることができるようにする。 ○ 「かぶは抜けません」の前にある言葉を並べた後、どの言葉が入ってもよいのではないかと揺さぶり、言葉の意味を一つずつ確認することで、場面転換を促す働きや、登場人物の気持ちの高まりに気付けるようにする。 ○ グループで音読をしている際には、インタビュアーとして、読み方の工夫や、内容の大体にかかわる質問をすることで、人物になりきったまま、場面の様子や登場人物の行動などを答えることができるようにする。	①	①	発言分析 行動分析
生かす (1)	3 音読発表会をし、学習を振り返る。〈1時間〉 ○ 音読発表会 ○ 振り返り	○ 第1時に音読したときの音声を聞かせた後に、グループの仲間と音読をよりよくしようと更新し続けた姿を価値付けることで、本単元の学びや、音読するよさを実感することができるようにする。	①		① 行動分析 記述分析

7 本時の目標

「うんとこしょ、どっこいしょ。」を音読することを通して、場面の様子や登場人物の行動など、内容の大体を捉えることができる。

8 本時の指導過程

学習活動及び学習内容（★は評価にかかわるもの）	教師の手立て
1 本時の学習について話し合う。 ○ 教師による音読 ・「みんなで頑張って抜いているから、大きな声で読んだほうがいいよ。」 等 ○ 学習問題 「うんとこしょ、どっこいしょ。」は、どのように読むのかな。 2 学習の見通しをもつ。 ○ 音読の工夫 ・ 教室を畑に変える。 ・ 登場人物になってみる。 ○ 道具 ・ 大きなかぶ ・ お面 ・ 全文が載ったホワイトボード 等 3 グループで音読する。（★） ○ 繰り返される言葉（グループの音読） A：おじいさんはかぶができるのを楽しみにしているから、声を大きくしようかな。 B：いいね。犬は元気だよ。どんどん声を大きくして、読みたいかな。 C：ゆっくり読むのは、どうかな。 ○ 内容の大体（インタビュー） T：おじいさん、おじいさん。今、とても大きな声で「うんとこしょ、どっこいしょ。」と言っていましたか、どうしてですか。 A：絶対かぶを抜きたいと思ったからです。 T：ところが、かぶは抜けませんでしたね。このあと、どうしますか。 A：おばあさんと呼んできます。 4 グループで音読したことを基に、全体で共有する。 ○ 全体の考え （例）「うんとこしょ、どっこいしょ。」は、だんだん声を大きくしたり、ゆっくり読んだりするとよい。 5 本時の学習を振り返る。 ○ リハーサル ○ 振り返り ・「にこにこみるみるです。だって、おじいさんになって、読むことができたからです。」 等	○ ねずみが加わった場面を、「小さい声」、「速い読み方」、「平坦な読み方」で読んだ3種類の音声を聞かせ、読み方の是非を問うことで、本時の問題意識をもつことができるようにする。 ○ 既習の「読むこと」領域における教材で、子どもが見いだした音読の工夫である、場所を見立てることとなり、きくことを確認することで、演じようとする気持ちを高めることができるようにする。 ○ 活用の有無は子どもに委ねた上で、大きなかぶやお面等を準備しておくことで、必要な道具を選択しながら、実際に動いて確かめたり、音読の工夫を考えたりすることができるようにする。 ○ グループで音読をしている際に、インタビュアーとして、読み方の工夫や、内容の大体にかかわる質問をすることで、人物になりきったまま、場面の様子や登場人物の行動などを答えることができるようにする。 ○ グループでの音読活動が停滞している際には、「先生の音読をもっとよくするにはどうすればよいかな。」と問うことで、導入時の教師による音読を想起し、よりよい音読の仕方を考えられるようにする。 ○ 音読に工夫が見られるグループを意図的に指名し、展開時と同様に、インタビュアーとなり、質問することで、他のグループの音読の工夫を知ることができるようにする。 ○ 次時が音読発表会であることを伝え、リハーサルの時間を設けることで、全体で共有した際に真似したいと思った考えを基に、自分の考え（音読の仕方）を更新することができるようにする。 ○ 学級のキャラクターを用いて、本時の学習を通してできるようになったことや、分かったことを振り返らせることで、音読の工夫や、仲間から得た学びを実感することができるようにする。

9 本時の評価規準

「うんとこしょ、どっこいしょ。」を音読することを通して、場面の様子や登場人物の行動など、内容の大体を捉えている。
（思考・判断・表現①）【発言分析・行動分析】

ワがつむいか(げつ)
おおきなかぶ

○ どうやって、よむの
かな。

①

ちい

②

はや

③

へひ
んく
い
がない

「うんとこしよ、どっこいしよ。」

ところが、
かぶはぬけません。

「うんとこしとこし」

それでも、
かぶはぬけません

「うんたにーどどいんー」。

まだまだ、
かぶはぬけません

「うん、はい」

まだまだまだまだ、
ぬけません。

「うんとこしとっつこし」

それでも、
かぶはぬけません

「うんとこしとつていんし」

やっと、
かたはぬいす

おおきいこえで、
（ちからづよく）よむ。
やさしく

